

第3分科会 [子どもの経験値を増やすコミュニティスクール ～大人になるまでにできること～]

話題提供者：	[小松 伸行]	(旭町中学校 校長)
	[降旗 都子]	(第三地区まちづくり協議会 副会長)
オブザーバー：	[早坂 淳]	(長野大学 社会福祉学部 教授)
司会：	[赤羽 絵美]	(今井公民館 主事)

会場：旭町中学校 教室／参加者：37名

1 協議の柱

学校だけでは学べない貴重な体験の場を、地域と協働で作る、それがコミュニティスクール（以下CS）です。CSを通じて得られる多くの発見や喜び、かけがえのない経験の積み重ねについて、実際の活動事例を基に、一緒に考えます。

2 話題提供

(1) 子ども・地域を巻き込み、持続可能性を探るCS活動（小松 伸行氏）

ア 生徒が参加する学校運営委員会（旭町中学校での取り組み）

(ア) 運営委員は、「中学生は、一生懸命考えながら生活していることが分かった」、「中学生と話をすると新しい発見がある」という気づきを得た。

(イ) 生徒は「地域の人と一緒に何かできるかも」、「地域の方は思った以上に頼りになる存在」という気づきを得た。

イ 地域と共に探った、持続可能な奥穂高岳登山（大野川小中学校での取り組み）

(ア) 学校登山として実施する場合、登山に不安な職員が多いこと、生徒全員が山頂を目指す登山はハードルが高いこと、学校だけで調整や安全確保などを行うのは負担が大きいなどの課題があった。

(イ) 伝統の奥穂高岳学校登山をCS主催にすることで、参加者の希望制が実現し、登山経験豊富な地域の方の引率が可能になった。また、登山をしたい子どもたちの居場所ができただけでなく、関わる大人の居場所になった。



(2) 地域住民だからこそできる学びの提供（降旗 都子氏）

ア 製糸業・近代産業発展の歴史を後世に伝えるため、歴史冊子・マップを作成。

イ 漫画家の協力、松本工業高校による動画作成等、地域のために動いてくれる人材との出会いから活動が進展

ウ 教員の異動があるので地域学習には限界がある。

エ 子どものために活動したい人は沢山いると思われるので、地域住民・教師の「やりたい」を叶えるために、人材バンクのような、気軽に相談、実行可能な体制を整える必要がある。



オ 実際にCSを経験した学生の発表や感想

(ア) 大学1年生のKさん

a 登壇した際に話した内容の抜粋

小中学校での地域学習などの経験は、高校3年生の進路選択の際に役立った。学校と自宅、中心市街地の自習スペースの間を行き来する中で、幼少期からなじみのある、場所や建物を意識、松本で育ったことを実感。

城下町、蚕糸業の歴史、水の豊かさ、芸術、自然について、中学時代に、松本のために熱心に活動する方たちに教えていただいた。

地域学習、探求学習、CSなどの学習は、社会との対話、目的達成のために手順を考え、問題に対処する、かけがえのない経験だった。また、学習の場に携わる大人が増え、指導の手厚さが向上するのも素晴らしいと思う。これを前提としつつ、私は二つの立場から意見を持っている。

学生の視点からは、探求学習はあくまで「経験」であり、「学習」の要素を充実させてほしいと考える。探求学習は、好きなことを学ぶ楽しさと、そのためには勉強が必要と気づく、教科学習の入り口として機能してほしい。松本の最前線で活躍する方々は学問を修め、実績を積み上げており、自分も地道に学問を修めたいと感じている。また、興味の対象が地域の自分は、地域についての探求学習は有意義だったが、児童・生徒の多様な興味関心を伸ばすには、地域に限定しすぎない柔軟さも必要と考える。

松本市民の視点からは、小中学校のカリキュラムの中で地域について学び、地域の魅力に気づく機会が全員にあるのは大切だと考える。松本の魅力をよく理解しているのは地元の住民より、他県からの移住者ではないかと感じ、恥ずかしさを覚えた経験から、一層地元の学生には松本について知ってほしいと感じる。

b 参加してみた感想や自身の気づきにつながったこと

実際に地域教育を受けた方のフィードバックが貴重であると、参加者や早坂教授からお声がけいただき、貢献できたと感じる。小中学生の現実的な視点から意見を伝える場面が多かったが、この感覚と大人たちの感覚が違うことに少し違和感を覚えた。

一方で、大人の経験の蓄積や物事を正確に判断する力も強く感じた。子供と大人の間といえる大学生の自分は、双方の架け橋として機能できるよう、今後も教育に関わりたいと感じた。

c 今後、行政職員や周りの大人たちに望むこと

実際に教育を受ける立場の意見や感覚を大切に進めてほしいと考える。

「何がやりたいのか」との問いかけでは、物事の考え方や伝え方を知らない子どもたちは意見をうまく表現できず、本当にやりたいことは聞き出せないと思う。大人の価値観や先入観を押し付けず、様々な方法を丁寧に試しつつ、子どもの表現を助けられるように、導いてほしいと思う。

(イ) 高校3年生のTさん

a 登壇した際に話した内容の抜粋

地域の方が公民館で開催した無料の学習塾に参加したおかげで、自分の課題であった数学の苦手意識の克服と、新たな居場所、人や地域との関わり大切さを学び、進路選択に役に立った。

高校の探究では、戦前・戦中の白黒写真をAIでカラー化して、若い世代が戦争を考えるきっかけづくりの活動に取り組んだ。写真収集を文書館、地域の方に依頼、実際の体験談をお聞きして、地域と関わってきた。

これらの経験から、自分から地域の知らない人と関わるのは、勇気が必要であるが、年代も性別も違った人と関わることで視野が広がり、人とのつながりの創出、興味関心を広がり、進路選択にも繋がると感じる。

b 参加してみた感想や自身の気づきにつながったこと

地域と関わる学習は、子どもの経験値を広げるためだけでなく、大人の成長にも寄与していることが分かり、非常に大切だと改めて認識。

また、意見交換を通して、子どもが思う以上に、地域の大人が子どものことを真剣に考えてくれていて驚いた。CSの取り組みが発展し、部活動の地域移行や学校登山の移行なども進みつつあると聞き、当時よりも地域と関わる機会が確実に増えており、嬉しく感じた。

ただし、すべての子ども・家庭に地域との関わりを強制せず、それぞれの思いに配慮しながら、関わりたい人がより気軽にかつ広く地域と繋がれる環境づくりが、今後さらに必要になると感じた。

c 今後、行政職員や周りの大人たちに望むこと

当時は年齢差もあり、地域との関わりに少し怖さや近寄りにくさを感じていたが、少しでも和らげる工夫があれば、より気軽に地域と関われたと思う。実際に、学校の補習時間を通して地域の大人の方と話す機会があり、心の壁が次第に小さくなった。こうした交流機会を増やすために、子どもたちが地域との関わりを「楽しい」と思え、大人になっても心に残るような場を作ってほしいと願っている。



3 意見交換

(1) Aグループ ～まずは関係づくりと姿勢を見せること～

一人一人の声を聞くことが子ども若者の経験値獲得のための出発点。一定の年齢になると物事のデメリットを考え始める。その中でも取組む意図や意味を捉えながら、先生・地域・公民館だけでなく、親の後押しも重要。

大人が粘り強く、熱意を持って取り組んでいる姿勢を見せることが大切。受け取ってくれる子どもは必ずいることを忘れずに、継続して取り組む。

(2) Bグループ ～経験値は「共につくるもの」～

子どもをもっと信じて任せる。企画や運営を一緒に行う。大人が主導・守るのではなく、何をやりたい・学びたいのか聞く。その結果、子どもの経験値が増え、

大人の負担も減り、持続可能な形になる。

(3) Cグループ ～原点は大人、主体は子ども～

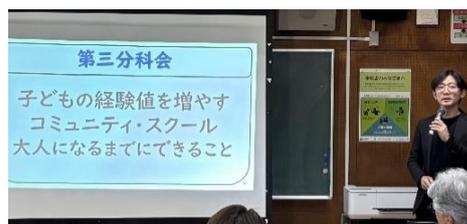
CSという言葉は新しいが、実践自体は昔からあった。主体は子どもだが、原点は大人。子どもが何を求めているかだけでなく、大人に何ができるのかという視点も重要。地域が常に開かれている、受け皿になっている状態が重要。

(4) Dグループ ～CSは選択肢を増やす仕組み～

CSは「子どもの可能性の選択肢を増やす場」だと感じた。子ども若者にとって第三の居場所（サードプレイス）が必要。公民館は有力な拠点になる。

教員・保護者ともに多忙であり、コーディネーターの役割が重要。

「やってみたらよかった」が継続の鍵。



4 まとめ【各発表者から学んだこと・全体総括】

(1) 性質の異なるCSの事例及び地域住民としてCSに関わってきた事例より

ア 子どもと地域住民が共に企画運営することの重要性

イ 既存の学校行事をCS主催とすることで、多様な人が関わり合える持続可能な行事に生まれ変わる可能性があること

ウ CSに関わる大人の居場所づくりになり得ること

エ 地域の愛着の熟成のためには地域を知ることが重要であること

オ 地域を教える役割は、異動等がある教員より地域住民が担う方が望ましい

(2) 小中学校時代にCSを通して、地域住民と接した経験を持つ学生の話より

ア 視野が広がり、人とつながりが生まれ、興味関心が広がること

イ 進路選択の一助になり得ること

ウ 地元の魅力に気付くとともに、愛着を持つきっかけを与えること

エ 大人は、先入観を押し付けず、様々な方法を試しながら、子どもがやりたいことをうまく表現できるよう導く必要があること。

(3) オブザーバーとして参加いただいた早坂教授の講評より

ア 「8つの外せない背景・課題」から、CSに取り組む意味等を再確認

イ CSを持続可能にするための4つの解決策「風の人から樹の人へ」、「個別の活動をつなげる」、「活動の見える化」、「人と活動をつなげる」

ウ 大人にとって、CSに関わることは有意義

CS事業を切り口として、仕掛ける側の目線（学校職員、地域住民等）及び受取る側の目線（児童生徒）の発表から、大人になる前に地域住民（＝他者≡社会）と関わる意味や方法等を共有することができた。

子どもの経験値を増やすために、今回学んだことを生かして、松本市各地区の特色ある地域性や移り変わる時代に沿った活動が広がっていくことを望みたい。

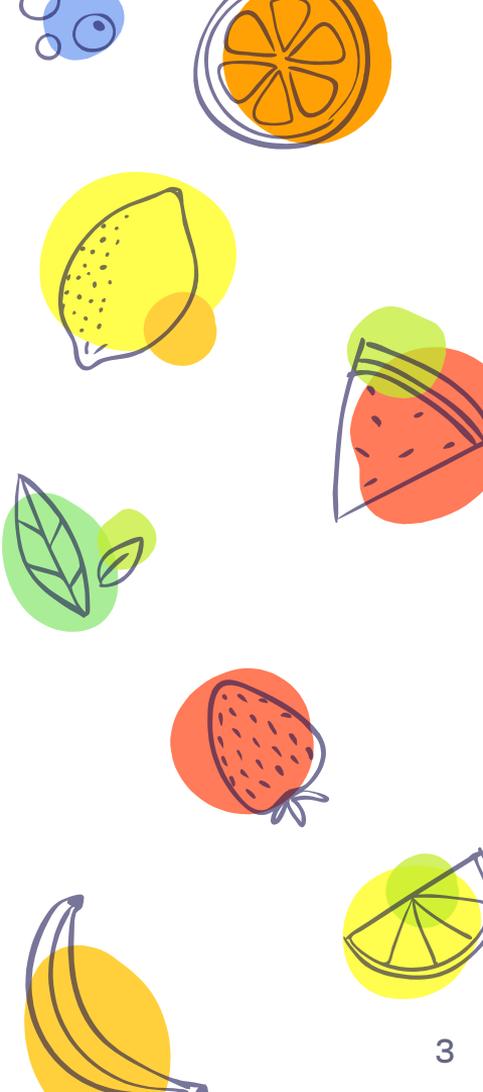
コミュニティスクールの可能性

旭町中学校 小松伸行

コミュニティスクールとは
子どもたちの豊かな成長を
支えるため
地域とともにある
学校づくりの仕組み

本日のメニュー

1	自己紹介
2	旭町中コミュニティスクール
3	コミュニティスクール主催 奥穂高岳登山
4	居場所づくり



2 旭町中コミュニティスクール

町会連合会関係	町会連合会会長 学校応援団代表 子ども育成会長
公民館関係	公民館長 公民館主事 地域づくりセンター長
関係団体	同窓会 児童館 信州大学医学部総務課 松本第一高等学校 信州大学学生
PTA	PTA会長 副会長
学校職員	校長 教頭 教務主任 各担当

旭町中
生徒会役員

2 旭町中コミュニティスクール

2025.06.05
第1回

地域の皆さんと話を
してみたら、思った以
上に身近で頼れる存
在に感じた。

中学生のことを気に
かけてくれているのが
わかってうれしかった。

中学生ともっと
話がしてみたい。

中学生が一生懸命
考えながら生活して
いるのがわかった。

地域の方と一緒に
何かができる気が
した。



奥穂高岳登山

奥穂高岳登山



2023 早朝の涸沢

日程の概略 (2023 実施の内容です。変更になる場合もあります。)

【1日目】7月22日(火)

安曇支所発…大野川校発…上高地ビジターセンター着…上高地発…横尾(昼食)…涸沢ヒュッテ着
5:40 6:10 7:00 7:30 10:30 14:30

【2日目】7月23日(水)

涸沢ヒュッテ発…コースごと行動(チャレンジコース・パノラマコース)…(山頂到着)…涸沢ヒュッテ着
6:00 9:30 14:00

【3日目】7月24日(木)

涸沢ヒュッテ発…横尾着…徳沢園(昼食)…上高地着…上高地発…大野川校着…安曇校着
7:00 9:00 10:30 13:00 13:40 14:20 14:40

参加費用概算 約29,000円~34,000円(小学生 約23,000~28,000円)

内訳 宿泊 1泊14,000円(小学生は11,000円)×2泊=28,000円(22,000円)

ガイド費用・保険加入等 1,000円~6,000円

*宿泊は、本年度の料金ですので、改定されることがあります。

*ガイド費用等につきましては、参加者の人数によって変動します。

*実費集金をいたします。

奥穂高岳登山 2023年

1 仲間と一体感を感じた。達成感があった。

2 登山を楽しみにしている生徒がいる。

3 地元の皆さんの思い出のある登山。

奥穂高岳登山 課題

- 1 登山に不安な職員が多い。
- 2 調整や安全確保など実施に向けた負担が大きい。
- 3 生徒全員が頂上を目指す登山はハードルが高い。

4 コミュニティスクール主催 奥穂高岳登山

「奥穂高岳登山を持続可能にするため」

主 催 ⇒ コミュニティスクール
引 率 ⇒ 経験豊富な地域の方
参加者 ⇒ 希望者

学校の課題は地域の課題 地域の課題は学校の課題

4 居場所づくり

⇒ R9 部活動の完全地域展開

⇒ 地域クラブ（まっち

コミュニティスクール
としてつくることは
できないだろうか。

⇒ 自分らしくいられる居場所

4 居場所づくり

子どもたちの居場所

＝

私たち大人の居場所

4 居場所づくり

コミュニティスクールの可能性

子どもたちの居場所

＝

私たち大人の居場所

話題提供の概要

2012年から、カタクラモール再開発問題に取り組み中で、現在のイオンモール松本のある場所に松本の製糸業をはじめとする近代産業発展の歴史があることを知り、息子たちから「なぜ地元の歴史なのに、学校で誰も教えてくれなかったのか?」

と問われたことをきっかけに、この歴史を後世に伝える活動を始めました。

活動する中で、地元の小中学生に地域の歴史を伝えるには教科書が必要と考え、第三地区まちづくり協議会として、子ども達にも受け入れやすい漫画という形で「お蚕様から生まれた町」という歴史冊子と、大正時代と現代のまちの地図を見比べられる歴史マップを作成し、市内小中学校、図書館、近隣の高校に配布しました。

その後2022年にはこの漫画を、松本工業高校の生徒さんたちにアニメーションにさせていただき、現在も松本市の公式YouTubeで配信しています。

毎年これらを使って清水中学校の一年生とまち歩き学習をして、まち歩きを入口とした子どもたちの探求学習のお手伝いをしています。



イオンモール松本で制作発表会を開催

片倉松本製糸場の事務所棟をデザインしたイオンモール松本のきらめきコートで完成披露会をしました。



『お蚕様から生まれた街』は松本市の公式YouTubeで見られます!

こちらの二次元コードより視聴できます (約15分)



今年の清水中学校の一年生のまち歩きの様子

沢山の地域の人と関わることで子どもたちの松本の町に対する思いに変化が現れる



造り酒屋さんのおかみさんに杉玉の説明を受けている



鉄道給水源跡の見学



沢山ある井戸も実際に飲んでみて味の違いを感じる

その他のコミュニティスクールに関わってきたもの

【源池小学校の田んぼづくり】



【源池小学校の3年生にブドウができるまでの授業】



【清水小学校2年生に蚕ってなあに?の授業】



地域だからこそできる子どもたちの学びとは?

コミュニティスクールに
地域の人材を生かすには

- ・松本の場合コーディネーターである公民館長が大事。
- ・地域には先生がたくさん眠っている
- ・地域の人材バンクづくりが必須

私が大切にしているのは、子ども達の
経験値を増やしてあげること

地域を知ること、自分たちの住むまちに関心を持ち
自分の住んでいるまちが好きになる。
将来まちを支える大人になることを願っています

第三分科会

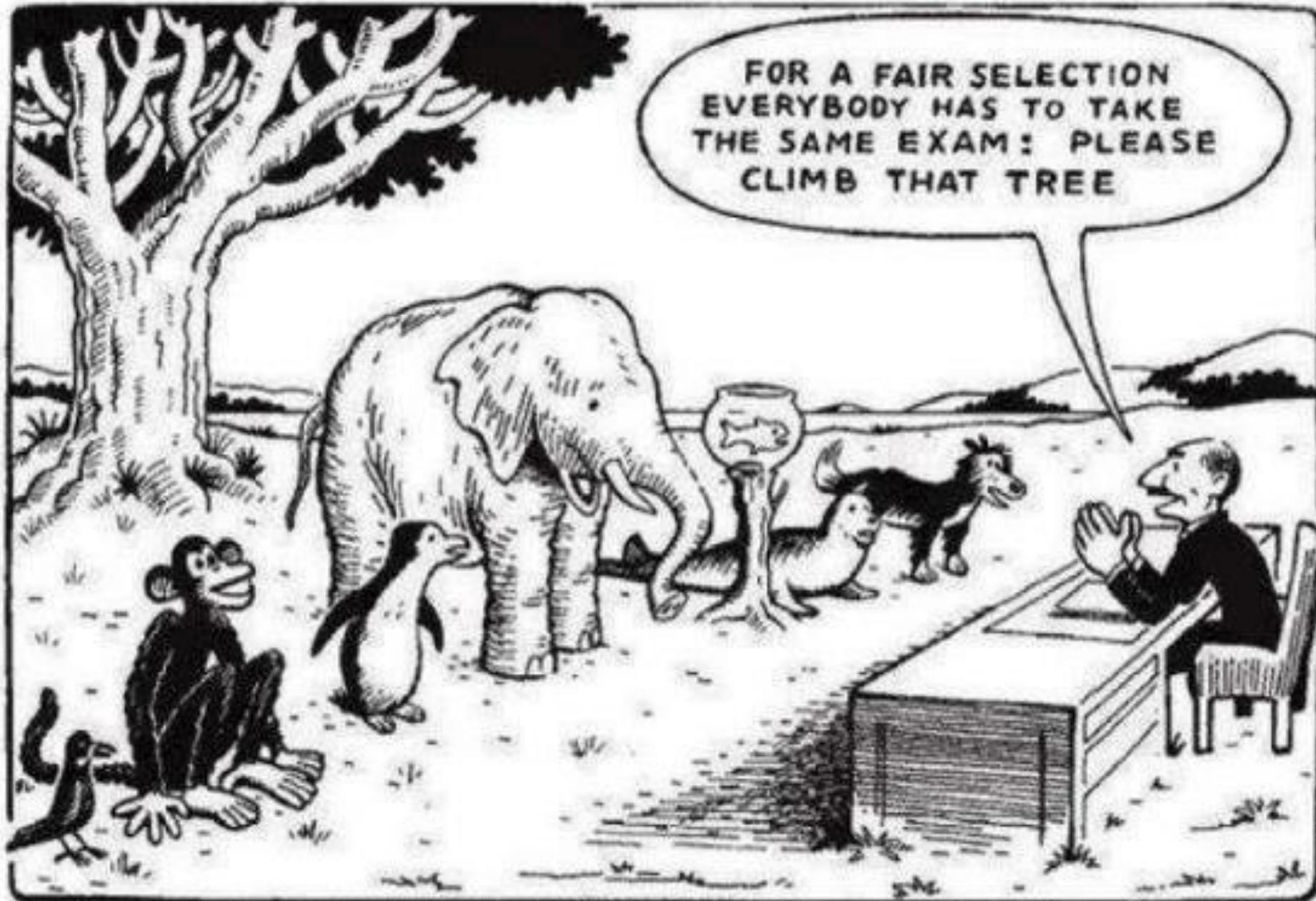
子どもを経験値を増やす
コミュニティ・スクール
大人になるまでにできること

なぜいまコミュニティ・スクール？

8つの外せない背景・課題

- ① 子どもの権利とウェルビーイングを「社会全体で守る」ための土台
 - ② 多様な子どもに対応しうる多様な受け皿の創出
 - ③ 「学校だけでは解けない地域社会の課題」に協働で取り組む体制
 - ④ 地域社会の持続可能性（地方創生・防災）を支える「地域の礎」
 - ⑤ 学校への信頼の向上，説明責任，学校教育（授業）の問い直し
 - ⑥ 教職員の働き方改革と専門性発揮に向けた連携・協働体制の構築
 - ⑦ 生涯学習・市民性（エージェンシー）を育てる実践の場の創出
 - ⑧ 変化の激しい時代に「人間にしかできないこと」の探究
- これらの実現を通じた【個人と社会のウェルビーイングの実現】！

多様な子どもたち



本日いただいた示唆

- 大人が**本気**になる
- 子どもを**真ん中**にする
- **学び**と**成長**を**核**に据える
- **郷土愛** ÷ 人 × 心 × 居場所

課題：いかに持続可能にするか

- 風の人から樹の人へ
- 個別の活動をつなげる
- 活動の見える化
- 人と活動をつなげる

子どもに見せよう

私たちの背中

人は人を浴びて人になる

おまけ

72歳

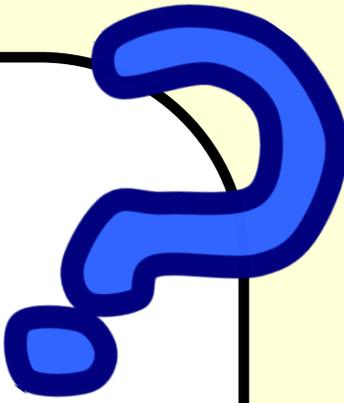
75歳

何歳まで生きて
くれますか？

知ってる？

認知症に

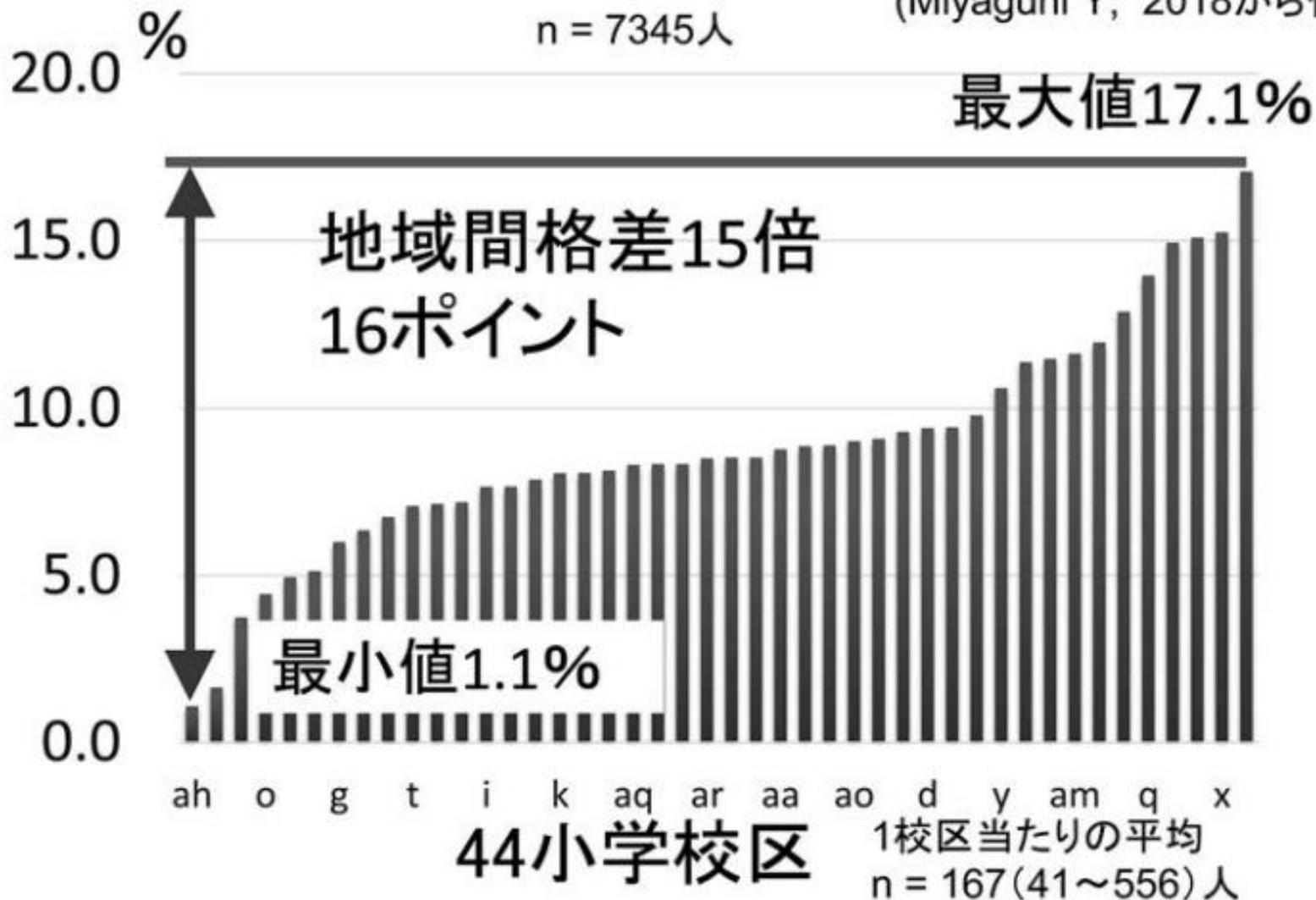
なりにくい地域



認知症になりにくいまちがある(前期高齢者)

AGES2003-13追跡データが得られた44小学校区(10市町村)

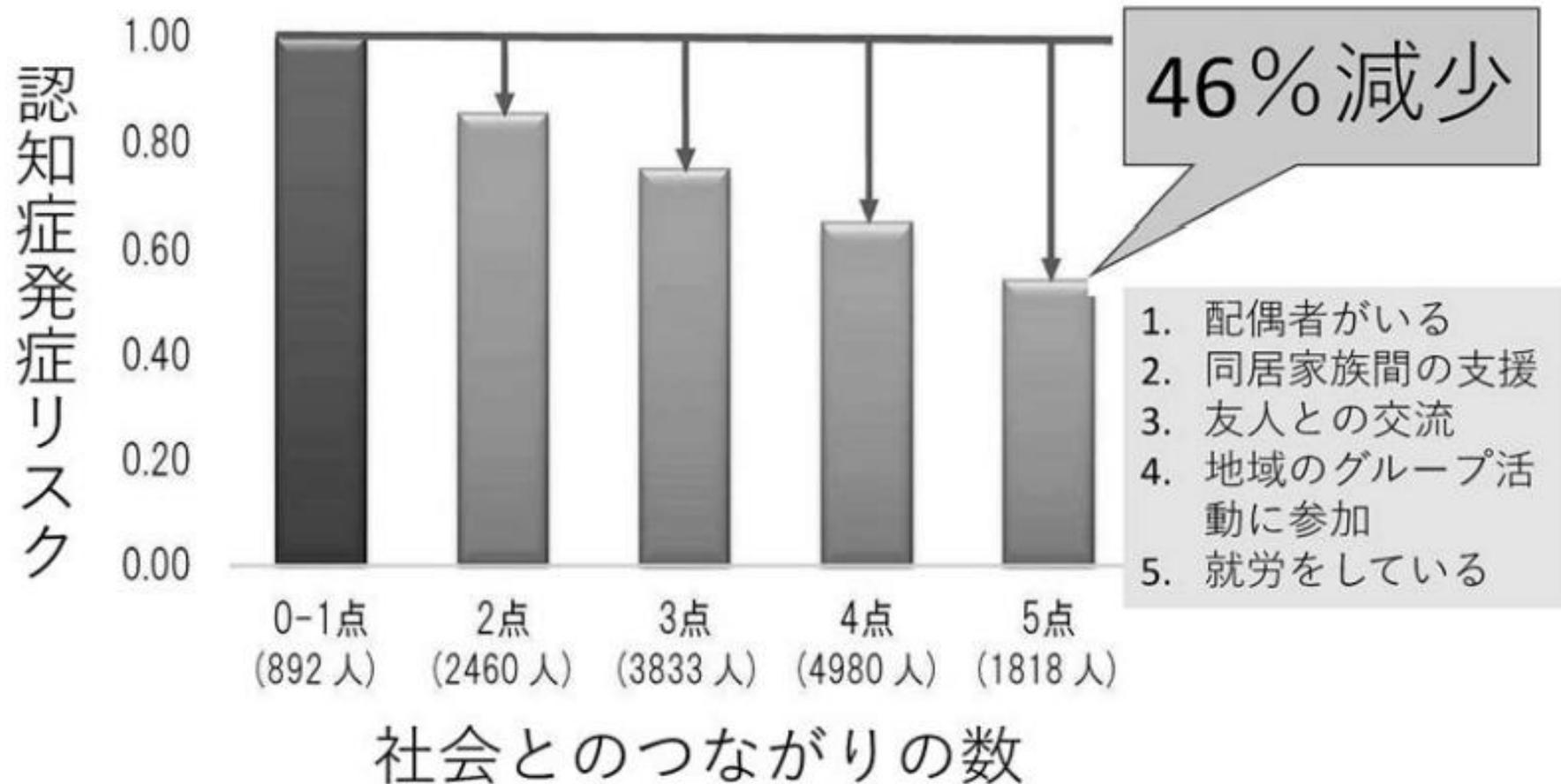
(Miyaguni Y, 2018から作成)



* 「地域共生社会推進全国サミットinかが2025」基調講演(近藤克典先生)の資料より(以下同様)

13984名を9.4年追跡

社会との多様なつながりがある人は 認知症発症リスクが半減



「誰かと一緒に笑う」人は 「一人でいるときのみ笑う」人と比べ 新規要介護認定リスクが約25%低い

12,571名を約6年間追跡し、新規要介護認定の発生を調べた



※ 年齢、性別、笑いの頻度、既往歴（高血圧・糖尿病・がん・脳卒中・心臓病）の数、喫煙、飲酒、身体活動、家族構成、社会参加、抑うつ傾向、教育歴、等価所得の影響を調整している。

* この結果が、偶然のためにたまたま観察される確率を計算したところ5%未満（統計学的に有意）。

† 「どちらも笑う」は他者の交流しているとき、一人でいるときの両方の状況で笑うことと定義した。